

令和 4 年 4 月 28 日現在

機関番号：13901

研究種目：挑戦的研究（萌芽）

研究期間：2018～2021

課題番号：18K18598

研究課題名（和文）「ひきこもり」の国際標準尺度の開発

研究課題名（英文）Development of an international standard scale for "Hikikomori"

研究代表者

古橋 忠晃（Furuhashi, Tadaaki）

名古屋大学・総合保健体育科学センター・准教授

研究者番号：50402384

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 4,900,000円

研究成果の概要（和文）：研究代表者はグラスゴー大学のHamish McLeod氏やMaki Rooksby氏らと共に「ひきこもり」尺度の英語版を作成した。尺度は順序尺度(ordinal scale)で作成し、生活状況(Daily Life & Self Care)、社会参加(Occupational Role)、社会的交流(Social Interaction)の三つの程度について総合的に把握できるものを作成した。作成した尺度を英語版は英国の臨床での適用を試み、さらに他尺度のとの相関を調べた。またフランス語版と日本語版を作成し、日仏の臨床で「ひきこもり」を対象に尺度を適用し信頼性と妥当性を検証するための準備を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

現在、英国、フランス、ドイツ、イタリア、スペインなどヨーロッパ各地で多くの「ひきこもり」研究がまに行われようとしている状況である。実際、「ひきこもり」を現地に見出したという報告がヨーロッパ各国からなされてきている。本研究によって国際標準尺度が作成されたので、今後ヨーロッパの研究者にとっても極めて有用となり、本研究はこれまでのひきこもり研究の体系や方向を大きく変革・転換させる可能性がある。研究代表者の西欧における臨床研究活動は、西欧のメディアでもしばしば取り上げられており、その成果は学術的意義を超えて社会的意義を有することが期待される。

研究成果の概要（英文）：I, the principal investigator, created an English version of a scale for "Hikikomori" together with my international collaborators, Dr. Hamish McLeod and Dr. Maki Rooksby of the University of Glasgow. We prepared the scale as an ordinal scale to comprehensively grasp the degree of three items: Daily Life & Self, Occupational Role, and Social Interaction. The prepared English version of the scale was tested in clinical practice in the United Kingdom and the correlation with other scales were examined. Furthermore, a French version and a Japanese version were created. I applied the scale for "Hikikomori" in clinical practice in Japan and France and prepared to investigate its reliability and validity.

研究分野：精神医学、精神病理学、ひきこもりの日仏臨床研究

キーワード：ひきこもり 社会的退却 フランス ヨーロッパ 青年 国際尺度

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

「ひきこもり」は、日本では1990年代以降深刻な社会問題となっている。統計的には、日本には100万人の「ひきこもり」がいるという最も多い推測もある。さらに、最近では、日本や韓国などのアジアの先進国だけでなく、イタリアやスペイン、フランスなど、ヨーロッパの各国の「ひきこもり」の出現についての報告(Furuhashi 2013, Furuhashi 2014, Furuhashi 2015, Furuhashi 2017)が登場しつつある。しかし、「ひきこもり」の重症度を測定する共通の尺度が存在しないので、研究代表者はしばしば不自由さを感じてきた。さて、日本において「ひきこもり」は現在以下のように複数の軸で評価されている。

第1軸：背景精神障害の診断

第2軸：発達障害の診断

第3軸：パーソナリティ傾向の評価

第4軸：ひきこもりの段階の評価

第5軸：環境の評価：ひきこもりを生じることに関与した環境要因とそこからの立ち直りを支援できる地域資源などの評価

第6軸：診断と支援方針に基づいたひきこもり分類

これらのうち、第4軸は「準備段階」「開始段階」「ひきこもり段階」と進んでいくとされている。だが、これは時間的段階を示すもので、それぞれの時期の重症度を測定する尺度ではない。既存のSocial-Adaptive Functioning Evaluation(1997)は統合失調症向けのものであり、Apathy Evaluation Scale(1991)のように本人を直接評価する尺度であったり、尺度の多くは自記式の尺度であったりと閉じこもって評価者が接近できない患者には有用性が低い。こうした中、研究代表者が2017年5月にグラスゴー大学で「ひきこもり」の講演会を行ったとき企画したグラスゴー大学精神科のHamish McLeod氏やMaki Rooksby氏と共に研究代表者が中心になり「ひきこもり」の状態を測定できる国際尺度を作成することになった。

2. 研究の目的

日本で発見された「ひきこもり」が、近年ヨーロッパ各地で確認されるようになってきている。だが、「様々な要因の結果として社会的参加(義務教育を含む就学、非常勤職を含む就労、家庭外での交遊など)を回避し、原則的には6ヵ月以上にわたって概ね家庭にとどまり続けている状態を指す現象概念」(厚生労働科学研究費補助金こころの健康科学研究事業「思春期のひきこもりをもたらす精神科疾患の実態把握と精神医学的治療・援助システムの構築に関する研究(H19-こころ-一般-010)」研究代表者 齊藤万比古)という定義上の原則は満たした上でも、各「ひきこもり」事例について、その程度、状態などの重症度を測定する共通の国際標準尺度が存在せず、客観的かつ科学的に「ひきこもり」事例の程度が把握できないのが現状である。そのため本研究では、共通の国際標準尺度を作成することを目的とした。

3. 研究の方法

1) 研究代表者がグラスゴー大学に滞在。Hamish McLeod氏らと共に「ひきこもり」尺度の英語版を作成。なお尺度は順序尺度(ordinal scale)で作成し、生活状況(Daily Life & Self Care)、社会的交流(Social Interaction)、学業や仕事など社会参加(Occupational Role)の三つの程度について総合的に把握できるものを作成(2018年6月)

2) 「ひきこもり」尺度を発表する英語論文を完成させ投稿(2022年度予定)

3) Hamish McLeod氏とMaki Rooksby氏らが来日し、「ひきこもり」尺度の日本語版を作成し臨床例への適用を検討(2019年7月)

4) 作成した尺度をイギリスの臨床においてそれぞれ適用。Apathy Evaluation Scale(1991)など他尺度との相関を調べた(2019年1月)

5) イギリスと日本のそれぞれの臨床で「ひきこもり」を対象に尺度を適用し信頼性と妥当性を検証(イギリス; 2019年, 日本; 2019年)

6) フランスのパリ・クレティユ・自治体共同医療センターの研究チームと「ひきこもり」尺度のフランス語版を作成(2021年10月)

7) パリ・クレティユ・自治体共同医療センターの研究チームが、仏語版尺度をフランスの臨床で適用し、信頼性と妥当性を検証(2022年1月~3月)

4. 研究成果

2018年度については、本科学研究費補助金の採択の通知は2018年7月にあり、その後、海外の研究協力者間で連絡を取り始めたが、海外の大学の研究協力者の来日の都合のために、2019年1月から3月に予定していた研究の一部が2ヶ月後ろ倒しになった。しかし、まず、始めにおこなうはずであった「ひきこもり」尺度のドラフトを作成するために、研究代表者はストラスブール大学に滞在。順序尺度(ordinal scale)で作成し、生活状況、社会的交流、学業や仕事など社会参加の三つの程度について総合的に把握できるものをドラフト作成した。フランスで、

研究代表者は、ストラスブル医学部精神科のセクター医療に臨床観察医としての資格を得ているので、2019年1月中旬から3月上旬まで閉じこもりなどの理由で病院に来院が困難な患者の訪問診療を行ってきた。その中で本尺度のドラフト版を試験的に施行し臨床的な有用性の感觸をまずは得た。同時に、共同研究を行っているグラスゴー大学心理学部と共同して、その後の本尺度の信頼性と妥当性の検証に向けた心理学的研究の準備を行うために、他の「無気力」などを評価する尺度（全て自記式ではあるが）や関連する文献を収集した。

2019年度については、2019年4月に、ストラスブル医学部精神科のセクター医療の看護師を招へいし、名古屋大学で治療を担当している日本のひきこもりのうち、親のみが受診して本人が受診しないケースの訪問診療を行い、本尺度の完成版を試験的に施行し臨床的な有用性を再確認した。2019年5月中旬に、研究代表者がグラスゴー大学に滞在し、ひきこもりの国際標準尺度のドラフトを完成させ、Apathy Evaluation Scale(1991)など他尺度のとの相関を調べる作業を行い、本尺度についての英語論文の出版をグラスゴー大学の共同研究者らと検討した。また、5月中旬以降はグラスゴーからフランスのストラスブルへと移動し、再び閉じこもりなどの理由で病院に来院が困難な患者の訪問診療を行い、本尺度の完成版を試験的に施行し臨床的な有用性を確認した。2019年7月下旬に研究協力者であるグラスゴー大学の Hamish McLeod 氏と Maki Rooksby 氏らを招へいし、シンポジウムを開催し、日本の心理学者や精神科医らと議論を行い、さらに、ひきこもりの国際標準尺度についてのワーキンググループを開き、「ひきこもり」尺度の日本語版についても検討を行った。また、2020年1月から3月には、研究代表者がフランスのストラスブルに滞在し、ストラスブル医学部精神科のセクター医療で研究代表者自身が訪問診療を行い、臨床的な有用性を再確認し、ストラスブル大学精神科で、ひきこもりの国際標準尺度のフランス語版の作成について検討を行った。また、完成した尺度の研究発表に向けて、名古屋大学のひきこもり学生の診療録から、作成した尺度で評価した得点、年齢、性別、学年、精神医学的診断、ひきこもりの期間、生活状況、学業や仕事など社会参加の状況、社会的交流の状況、インターネットやゲームの没入の程度を抽出するために、名古屋大学総合保健体育科学センター健康・スポーツ系研究倫理委員会に研究倫理審査申請を2019年11月に行い受理された。

当初の予定では、2020年8月下旬に、研究代表者がグラスゴー大学に滞在し、ひきこもりの国際標準尺度を完成させ、本尺度から得られた研究データについての英語論文の出版をグラスゴー大学の共同研究者らと検討し、また、8月下旬以降はグラスゴーからフランスのストラスブルへと移動し、2020年10月上旬まで再び閉じこもりなどの理由で病院に来院が困難な患者の訪問診療を行い、本尺度の完成版を試験的に施行し再び臨床的な有用性を確認するはずであったが、新型コロナウイルス感染症の拡大防止に係る海外渡航の制限のために、英国やフランスに研究代表者が渡航することができなかった。

さらに、2021年1月から3月には、研究代表者がフランスのストラスブルに滞在し、ストラスブル医学部精神科のセクター医療で研究代表者自身が訪問診療を行い、臨床的な有用性を再確認し、ストラスブル大学医学部精神科でひきこもりの国際標準尺度のフランス語版の作成について検討を行う予定であったが、やはり同様に、新型コロナウイルス感染症の拡大防止に係る海外渡航の制限のために、英国やフランスに研究代表者が渡航することができなかった。

以上の予定の中には、訪問診療の中で臨床的な有用性確認するなど、オンラインに切り替えることができないものが多かった。

一方、名古屋大学のひきこもりの診療録から、さらに、作成した尺度で評価した得点、年齢、性別、学年、精神医学的診断、ひきこもりの期間、生活状況、学業や仕事など社会参加の状況、社会的交流の状況、インターネットやゲームの没入の程度を抽出した研究データの論文の作成については、日本に留まりながらもオンラインで研究協力者であるグラスゴー大学の Hamish McLeod 氏と Maki Rooksby 氏らと行うことができ、2021年度以降に海外の学術専門誌に投稿するための準備が整った。

2021年度は、2021年5月から7月、8月から10月、2022年1月から3月は、研究代表者がフランスのストラスブルに滞在し、ストラスブル医学部精神科のセクター医療で研究代表者自身が訪問診療を行い、臨床的な有用性を再確認することができた。以上の予定の中には、訪問診療の中で臨床的な有用性を確認するなど、オンラインに切り替えることのできないものが多かった。一方、研究データの論文の作成については、日本に留まりながらもオンラインで研究協力者であるグラスゴー大学の Hamish McLeod 氏と Maki Rooksby 氏らと行うことができ、海外の学術専門誌に投稿する直前の状態まで準備が整った。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計17件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 1件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 古橋 忠晃	4. 巻 49
2. 論文標題 フランスのディオゲネス症候群から見えるごみ屋敷の問題について	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 大阪保険医雑誌	6. 最初と最後の頁 22-26
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 古橋 忠晃	4. 巻 36
2. 論文標題 ひきこもりの自助グループ	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 精神科治療学	6. 最初と最後の頁 1301-1307
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 古橋 忠晃	4. 巻 10
2. 論文標題 Topics Q&A ひきこもりとうつ病について教えてください	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 DEPRESSION JOURNAL	6. 最初と最後の頁 22-23
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 古橋 忠晃	4. 巻 35(4)
2. 論文標題 ひきこもりに関する日欧比較 - フランスを中心に -	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 精神科治療学	6. 最初と最後の頁 341-348
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 古橋 忠晃	4. 巻 95(4)
2. 論文標題 堂々とした「ひきこもり」 - フランスHikikomori事情1 -	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 ふらんす	6. 最初と最後の頁 68-69
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 古橋 忠晃	4. 巻 95(5)
2. 論文標題 日本の精神科医を受け入れるフランスのひきこもり - フランスHikikomori事情2 -	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 ふらんす	6. 最初と最後の頁 60-61
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 古橋 忠晃	4. 巻 95(6)
2. 論文標題 フランスの「ひきこもり」はどこにひきこもるのか? - フランスHikikomori事情3 -	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 ふらんす	6. 最初と最後の頁 60-61
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 古橋 忠晃	4. 巻 95(7)
2. 論文標題 フランスの「ひきこもり」の親たち - フランスHikikomori事情4 -	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 ふらんす	6. 最初と最後の頁 60-61
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 古橋 忠晃	4. 巻 95(8)
2. 論文標題 confinerかse retirerか - フランスHikikomori事情5 -	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 ふらんす	6. 最初と最後の頁 60-61
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 古橋 忠晃	4. 巻 95(9)
2. 論文標題 サンドローム・ド・ディオジェーヌ - フランスHikikomori事情6 -	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 ふらんす	6. 最初と最後の頁 62-63
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Maki Rooksby, Tadaaki Furuhashi, Hamish J. McLeod	4. 巻 19(3)
2. 論文標題 Hikikomori: a hidden mental health need following the COVID-19 pandemic.	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 World Psychiatry	6. 最初と最後の頁 399-400
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1002/wps.20804	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 古橋 忠晃	4. 巻 49(2)
2. 論文標題 ロックダウンと「ひきこもり」新型コロナウイルスをめぐって	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 現代思想	6. 最初と最後の頁 62-69
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 古橋 忠晃	4. 巻 40
2. 論文標題 フランスにおける「ひきこもり」の臨床活動と理論的実践を通して	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 臨床精神病理	6. 最初と最後の頁 247-254
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 横山慶子, 古橋忠晃, 山本裕二	4. 巻 17
2. 論文標題 身体運動相談：ひきこもり学生支援の新たな試み	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 名古屋大学学生相談総合センター紀要	6. 最初と最後の頁 36-41
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 杉岡正典, 鈴木健一, 山内星子, 古橋忠晃, 長島渉, 横井綾, 船津静代, 井戸智子, 栗原りえ, 佐藤剛介, 後藤悠里, 李明憲, 織田万美子, 松本真理子	4. 巻 17
2. 論文標題 名古屋大学学生相談総合センターにおけるグループワークによる援助活動の実際と課題	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 名古屋大学学生相談総合センター紀要	6. 最初と最後の頁 3-11
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 古橋忠晃	4. 巻 140
2. 論文標題 ラカンの観点から見た、現代社会の病理の一つである「ひきこもり」について	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 iichiko	6. 最初と最後の頁 101-112
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 古橋忠晃	4. 巻 34
2. 論文標題 ひきこもりの日仏比較	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 精神科	6. 最初と最後の頁 157-163
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計37件 (うち招待講演 37件 / うち国際学会 20件)

1. 発表者名 Tadaaki Furuhashi
2. 発表標題 Spread of “Hikikomori” across Europe following the COVID-19 pandemic
3. 学会等名 European Congress for Emergency Medicine and Critical Care (Online) (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Tadaaki Furuhashi
2. 発表標題 The Hikikomori phenomenon and relation to incels
3. 学会等名 The Incel phenomenon : Exploring Internal and External Issues around Involuntary Celibates (Online) (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Tadaaki Furuhashi
2. 発表標題 Construction de l' Echelle pour Evaluer l' Etat de Hikikomori
3. 学会等名 Centre hospitalier intercommunal de Creteil Paris (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 古橋 忠晃
2. 発表標題 フランスのHikikomoriシエン、日本のひきこもり支援
3. 学会等名 名古屋市ひきこもり支援セミナー（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Tadaaki Furuhashi
2. 発表標題 Reclus et sans projet : qui sont les Hikikomori ?
3. 学会等名 119e colloque international de l'Association du Congrès de Psychiatrie et de Neurologie de Langue Française (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Tadaaki Furuhashi
2. 発表標題 Le risque d'augmentation au niveau mondial du nombre de Hikikomori après l'épidémie de Covid-19
3. 学会等名 Journal Club (Faculté de médecine, Université de Strasbourg) (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Tadaaki Furuhashi
2. 発表標題 Le risque d'augmentation du nombre de Hikikomori après l'épidémie de Covid-19
3. 学会等名 Centre hospitalier intercommunal de Creteil Paris (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Tadaaki Furuhashi
2. 発表標題 Hikikomori: an unusual after-effect of the Covid-19 pandemic
3. 学会等名 Fondazione Internazionale Menarini Pills of Psychiatric and Neurology 2021 International Web Forum (Online) (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Tadaaki Furuhashi
2. 発表標題 Hikikomori : maladie ou mode de vie ?
3. 学会等名 Centre Hospitalier Intercommunal de Creteil, Paris (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Tadaaki Furuhashi
2. 発表標題 Hikikomori (social withdrawal) in Japan and France: exploring creative activities for promoting connection back to society
3. 学会等名 Islands in the Global Age: Identification, Estrangement and Renewal in the East-West Dialogue (Online) (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Tadaaki Furuhashi
2. 発表標題 Le Phenomene du Hikikomori globalise ou Retrait social pathologique : un confinement volontaire?
3. 学会等名 Le seminaire web de l'Association du Congres de Psychiatrie et de Neurologie de Langue Francaise (CPNLF) (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Tadaaki Furuhashi
2. 発表標題 《Hikikomori (social withdrawal) 》 in Japan and in Europe (especially in France)
3. 学会等名 Daiwa Foundation Japan House (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Tadaaki Furuhashi
2. 発表標題 《Hikikomori (social withdrawal) 》 in Japan and in Europe; clinical practice in France
3. 学会等名 GPPC's seminar, Glasgow (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Tadaaki Furuhashi
2. 発表標題 《Phenomene de Hikikomori 》 dans la psychiatrie : Etat actuel au japon et en France
3. 学会等名 Journal Club (Faculte de medecine, Universite de Strasbourg) (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Tadaaki Furuhashi
2. 発表標題 《Hikikomori (social withdrawal) 》 in Japan and in Europe - Hikikomori, an international science perspective
3. 学会等名 Japan-UK Hikikomori Workshop in Nagoya University (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 古橋 忠晃
2. 発表標題 フランスの「ひきこもり」からみた名古屋大学の「ひきこもり」について
3. 学会等名 第24回国立七大学安全衛生管理協議会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 古橋 忠晃
2. 発表標題 大学生における自殺予防とひきこもり支援
3. 学会等名 第43回日本自殺予防学会総会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 古橋 忠晃
2. 発表標題 大学における「ひきこもり」や発達障害に対するグループ活動の実践
3. 学会等名 第7回成人発達障害支援学会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Tadaaki Furuhashi
2. 発表標題 Le phenomene du Hikikomori globalise - Construction de l'echelle pour evaluer l' etat de Hikikomori -
3. 学会等名 Seminaire franco-japonais sur le 《 Hikikomori 》（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 古橋 忠晃
2. 発表標題 「ひきこもり」を生み出す社会について 日本とヨーロッパの事情
3. 学会等名 特別支援教育研修会連続講座(南山大学附属小学校) (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Tadaaki Furuhashi
2. 発表標題 Le phenomene du Hikikomori globalise ou "retrait social pathologique" en France et au Japon : historique et donnees actuelles-
3. 学会等名 L'Association Corse Equilibre et Sante Mentale (ACESM) (招待講演)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Tadaaki Furuhashi
2. 発表標題 Le phenomene HIKIKOMORI ou "retrait social pathologique" en France et au Japon
3. 学会等名 Maison de l'Adolescent du 94 (Universite de Creteil, Paris) (招待講演)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Tadaaki Furuhashi
2. 発表標題 Soiree pour discuter du Hikikomori
3. 学会等名 ITHAQUE a Strasbourg (招待講演)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Tadaaki Furuhashi
2. 発表標題 The History of Hikikomori as a Social and Medical Phenomenon - Hikikomori in Japan and in France -
3. 学会等名 SW Glasgow & East Renfrewshire CAMHS Team Away Day (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Tadaaki Furuhashi
2. 発表標題 Construction de l'Echelle pour Evaluer l' Etat de Hikikomori
3. 学会等名 Centre hospitalier le Vinatier Universite Claude Bernard Lyon (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Tadaaki Furuhashi
2. 発表標題 Hikikomori en France et au Japon - Construction de l'Echelle pour Evaluer l' Etat de Hikikomori -
3. 学会等名 Journal Club (Faculte de medecine, Universite de Strasbourg) (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Tadaaki Furuhashi
2. 発表標題 Temps d'Echanges avec le professeur Furuhashi sur le film
3. 学会等名 Ithaque a Strasbourg (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Tadaaki Furuhashi
2. 発表標題 Hikikomori and "Human Movement Consultation"
3. 学会等名 Active Minds Workshop, Glasgow (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 古橋 忠晃
2. 発表標題 青年期精神医学における青年の『ひきこもり』 - 日本と海外の事情 -
3. 学会等名 I第115回大幸ライフトピア連携研究会保健学セミナー (招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 古橋 忠晃
2. 発表標題 青年の心の闇と『ひきこもり』
3. 学会等名 名古屋大学ホームカミングデイ (招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 古橋 忠晃
2. 発表標題 日本のひきこもり、フランスのHikikomori - 彼らは私たちに何を投げ掛けているのか -
3. 学会等名 奈良大学臨床心理クリニック公開講座 (招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 古橋 忠晃
2. 発表標題 日本とフランスにおける「ひきこもり」現象
3. 学会等名 第2回名古屋トラウマ研究会主催講演会(於；日本福祉大学)(招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Tadaaki Furuhashi
2. 発表標題 < Hikikomori (social withdrawal) > in Japan and France - Hikikomori as a Social and Medical Phenomenon -
3. 学会等名 Heymans Colloquium, University of Groningen (招待講演)(国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Tadaaki Furuhashi
2. 発表標題 Hikikomori as a Social and Medical Phenomenon - Hikikomori in Japan and in France -
3. 学会等名 University of Goteborg (招待講演)(国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Tadaaki Furuhashi
2. 発表標題 Phenomene Hikikomori (retrait social) en France et au Japon
3. 学会等名 Conference Maison Universitaire a Strasbourg (招待講演)(国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Tadaaki Furuhashi
2. 発表標題 Phenomene de Hikikomori : l'historique et l'etat actuel au japon puis ce qui se passe en Europe et en France
3. 学会等名 ITHAQUE a Strasbourg (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Tadaaki Furuhashi
2. 発表標題 Le phenomene du Hikikomori globalise, le retrait social dans les societes de competition, exemples en France et au Japon
3. 学会等名 Amphi. Lagache de la Faculte de psychologie, Universite de Strasbourg (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 古橋 忠晃 (分担執筆)	4. 発行年 2021年
2. 出版社 医学書院	5. 総ページ数 200
3. 書名 精神科シンプトマトロジー-症状学入門-心の形をどう捉え、どう理解するか (編集 内海健 兼本浩祐)	

1. 著者名 Tadaaki Furuhashi	4. 発行年 2021年
2. 出版社 Presses de l'EHESP, Rennes	5. 総ページ数 192
3. 書名 L'experience de l'Universite de Nagoya au Japon. In: Hikikomori, une experience de confinement. Sous la direction de Natacha Vellut, Claude Martin, Cristina Figueiredo, Maia Fansten.	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
英国	グラスゴー大学			
フランス	ストラスブール大学			
英国	グラスゴー大学			
フランス	ストラスブール大学			
英国	グラスゴー大学			
フランス	ストラスブール大学			
英国	グラスゴー大学			
フランス	ストラスブール大学			